



8月15日は、日本では終戦記念日ですが、ルワンダでは「マリア被昇天」という休日です。ルイスさんは毎年この日に、ウムチヨムウイザ学園で、保護者と地域の方々を招き「平和コンサート」を開いています。今年で5年目を迎えました。

主賓に宮下孝之・特命全権大使、ウンダヤンゼ地域代表ら。筆者らも来賓として紹介していただきました。ルイスさんはルワンダ大虐殺と日本の広島・長崎の被爆体験を結びつけてお話をします。国家と大人が持つ悲しみの体験を呼び起こしながら、心に刻むように平和の意味を子どもたちに語ります。静寂だけが漂います。

学園児童のクラブ発表も見事でしたが、印象深かったのは、有名歌手マニー・マーティン氏（30）が高音の美しい声で歌う『栄冠は君に輝く』（全国高等学校野球選手権大会の歌）が、讚美歌のように参加者の頭上に響き渡ったこと、そして地元のバンド・インバラの演奏に合わせて皆が踊り、大いに盛り上がったことです。子どもたちは、平和であることの喜びを体

感できたと思います。そして、8月17日には「キガリ ジェノサイドメモリアル（キガリ虐殺記念館）」を訪れました。殺戮（さつりく）で親を失った若者たちの案内でした。

戦場化した村の写真や、実物の頭蓋骨を見たとき、私の脳裏には、ガタルカナルで戦死した無数に折り重なる兵士、そして広島原爆で水を欲して川に流れ込んだ市民の叫び声が走りまわりました。写真に写る幼い子の無表情さに胸が痛みます。

1994年4月から始まったルワンダ大虐殺は、内戦でも部族闘争でもありませんでした。まさに共同社会を壊滅させるための集団殺戮、戦争でした。同一民族の顔の長さを測り、ツチ族とフツ族に分けたのは誰か。戦乱を生むように言語を奪い、戦いをあおったのは誰か。貧しい民に武器を与えたのは誰か。なぜ、当時の国連が彼らを見捨てたのか。この国の民は事実

大虐殺の真実知り 平和を胸に刻む



筆者と初対面のマリヤナさんが「以前に会ったことないかしら」

と教育から、影の存在と真の罪人を知っています。

しかも、この国の民は3カ月で80万人（公表数）を超える命を奪った者を許し、罪を認めた者たちを救い、平和を希求することのみを選びました。だからこそ、東洋の小国・日本を手本に、奇跡の復興を続けます。

帰りの車中で私は、戦場からやせ細って帰ってきた私の父が、貧しくも明るく馬車馬のように働いて家族を守り続けたこと、そして幼くして両親を失った弟妹のために実兄が、油まみれになって働く姿を思い出し、語りながら山田氏と涙していました。

同日、夫を撲殺されたルイスさんのお母様マリヤナさん（96）にお会いしました。若い頃の娘ルイスさんのこと、深い心の傷を癒やした経過などを話されました。柔和な表情を浮かべる彼女の左腕には、刻まれた多くの（しわ）皺と、骨折した痕跡が残っていました。

（次回につづく）

（嶋田秀樹＝須坂市田の神町在住、元教員）



写真をたどりながら、ルワンダ大虐殺の惨状を語るルイスさん